丹後地域の弥生墓制

肥　後　弘　幸

1　はじめに

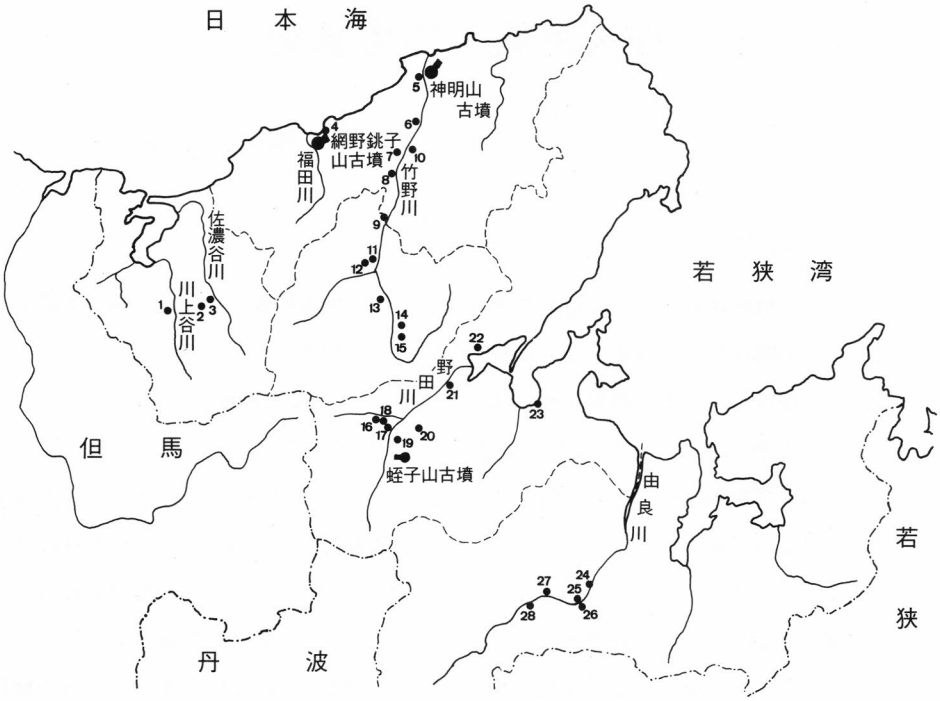
京都府北部の丹後地域は、山陰地域の東端に位置し、北陸地域と若狭湾を挟んで隣接する地域で、弥生時代前期末以来丘陵上に墓を営むことが常に行われてきた地域である。ところで、この地域には、網野町銚子山古墳(全長198m)・丹後町神明山古墳(全長190m)・加悦町蛭子山古墳(全長145m)の3基の大型前方後円墳が存在する。これらの大型古墳の存在は、畿内地域を除くと極めて異例な状況であり、「丹後王国論」「日本海文化論」等で話題となるところである。ところで、これら3基の大型前方後円墳は、5世紀を前後する時期に突如として造営されたものであり、その前段階には、100m級の大型古墳はおろか前方後円墳さえ現在のところ確認されていない。ここでは、近年国営農地開発等によって資料の増えてきた発掘調査の成果を踏まえて古墳出現期までの弥生時代墓制の系譜を概観してみたい。

京都府北部の弥生墓制については、現段階までに2つの論文が発表されている。1980年に釋龍雄氏が「京都府北部における弥生時代の墳墓について」として『水無月山遺跡発掘調査報告書』のなかで7遺跡を紹介されている。[1] その後、調査が飛躍的に増大し現在25遺跡30例が報告されているのが現状である。また、1988年に久保哲正氏が「丹後における弥生墓の展開」のなかで、大きな平野部を確保し得ない丹後地域において可耕地を確保するために墳墓が早い段階から丘陵上に営まれていること、それにもかかわらず生産基盤の脆弱さは克服できずに古墳への発展がおくれた点を指摘をしている。[2]

なお、取り上げる地域の中心は、狭義の丹後地域(丹後半島部)であるが、隣接する由良川中流域との接点として由良川下流域を、但馬地域との接点として熊野郡を含めて考えていきたい。また、時代区分については、土器に基づくものとし、弥生時代後期から布留式古段階までの土器群を弥生時代後期前葉・同中葉・同後葉・古墳時代前期初頭・前期前葉と区分した。

2　各墳墓の概観

(1) 川上谷川―佐濃谷川流域(熊野郡)



第1図　丹後の墳墓位置図

1．権現山遺跡　2．蔵谷遺跡　3．豊谷墳墓　4．岡城山遺跡　5．大山墳墓群
6．西小田古墳群(下層)　7．坂野丘遺跡　8．太田4号墳(下層)
9．大田南2号墳　10．奈具岡遺跡　11．七尾遺跡　12．カジヤ遺跡
13．小池古墳群(12・13号墓)　14．帯城墳墓群　15．大谷遺跡(大谷古墳下層)
16．西谷墳墓群　17．荒神山古墳群　18．犬石西C古墳群　19．内和田古墳群　20．寺岡遺跡
21．霧ヶ鼻古墳群　22．千原遺跡　23．波路古墳　24．花ノ木遺跡　25．志高遺跡
26．シゲツ墳墓群　27．水無月山遺跡　28．桑飼上遺跡

権現山遺跡　熊野郡久美浜町字品田小字ユリ[3]。丘陵上に営まれた一辺50mを測る大形の方墳である権現山古墳の墳頂部から弥生時代後期の土壙墓1基が検出されている。なお、権現山古墳は、竪穴式石室からなる中心主体の周辺に木棺墓6基・土器棺1基を配するもので、前期末に比定されている。

蔵谷遺跡　熊野郡久美浜町字永留小字蔵ノ谷[4]。丘陵先端に営まれた土壙墓群である。長辺1.0～2.5mの長方形土壙4基と直径0.6～0.7mの円形土壙3基からなる。土壙1から鉄剣と破砕土器が出土している。古墳時代前期前葉に比定されている。

豊谷墳墓　熊野郡久美浜町字丸山小字豊谷[5]。佐濃谷川を望む丘陵頂部に位置する弥生時代中期の台状墓である。古墳時代中期に営まれた堤谷古墳群A支群7号墳の下層に存在し、組合式木棺を埋葬施設とする墓壙1基が検出されている。棺内から石鏃22点が、墳頂部から打製石槍1点が出土している。現在調査中である。

（2）福田川・竹野川流域（竹野郡・中郡）

岡城山遺跡　竹野郡網野町字小浜小字城山[6]。日本海を望む丘陵上から出土した土器群が知られており、その出土状況及び出土地点の形状（3m程度の平坦面）から方形台状墓の存在が指摘されている。弥生時代後期後葉に位置付けられる。

第2図　大山墳墓群

大山墳墓群　竹野郡丹後町字大山小字寺大門[7]。竹野川に望む丘陵上に営まれた大規模な墳墓群である。

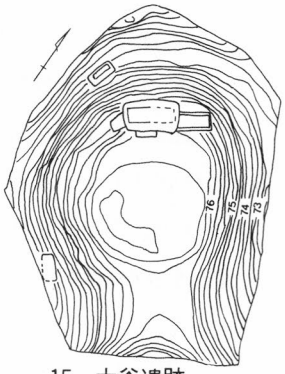
3～8号墓は、同一丘陵上に連続して営まれた方形台状墓群である。一辺10m前後を測る台状墓の墳頂部には、基本的に埋葬施設1基のみを営み、周辺に木棺墓28基・土器棺9基の多数の埋葬施設を配置する。墳丘上の埋葬施設は、周辺埋葬施設に比べて、墳丘の占地という点で傑出するものの棺の規模・副葬品の有無の点からはその優位性は強調されない。副葬品には、ガラス勾玉・ガラス管玉・ガラス小玉・碧玉製管玉等の玉類および銅鏃・鉄鏃・鉇・刀子等の武器・工具類がある。弥生時代後期前葉から中葉に位置付けられる。

西小田古墳群（下層）　竹野郡丹後町字西小田小字石ヶ谷[8]。竹野川に望む丘陵上に位置する古墳群の下層から検出された弥生時代後期中葉の墳墓群である。墳頂部から土器棺が検出されている。

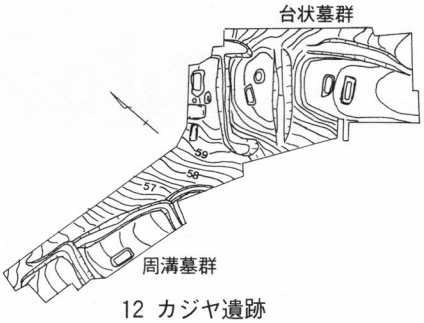
坂野丘遺跡　竹野郡弥栄町字和田野小字坂野[9]。竹野川を望む丘陵の頂部及びその周辺に営まれた墳墓である。丘陵頂部からは、弥生時代中期後葉と後期後葉の埋葬施設が検出されており、同一地点で2時期の弥生墳墓が重複している。中期後葉（Ⅰ期）には、丘陵頂部の平坦面に1基以上の埋葬施設を設け、墳丘外の周辺部平坦面に周辺埋葬施設を配置している。中心主体（第1主体部）は、5.9×3.1m・深さ2.4mを測る墓壙の中から長さ3.6mの棺が検出されている。棺外に土器供献（破砕土器含む）が認められる。後期後葉（Ⅱ期）には、第1主体部に重複して5.5×3.0m・深さ1.2mを測る第2主体部が営まれており、長さ3.0mを測る棺内から多量の玉類（大小6個のガラス製勾玉・約500個のガラス製小玉・大小326個の管玉）と鉄剣が出土している。

太田4号墳（下層）　竹野郡弥栄町字和田野小字下大田[10]。丘陵先端部に営まれた太田4号墳の下層から5基の土坑が検出され、弥生時代後期の台状墓に伴うものとして報告されて

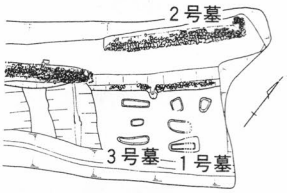
11 七尾遺跡



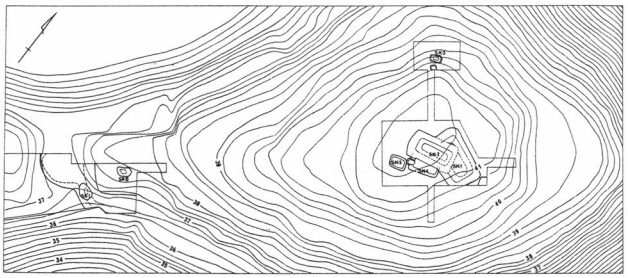
15 大谷遺跡



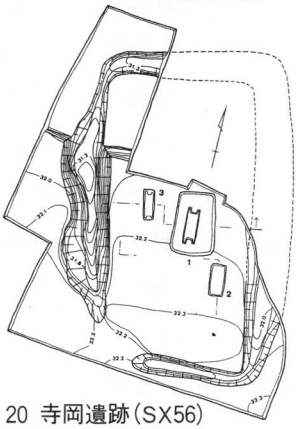
12 カジヤ遺跡



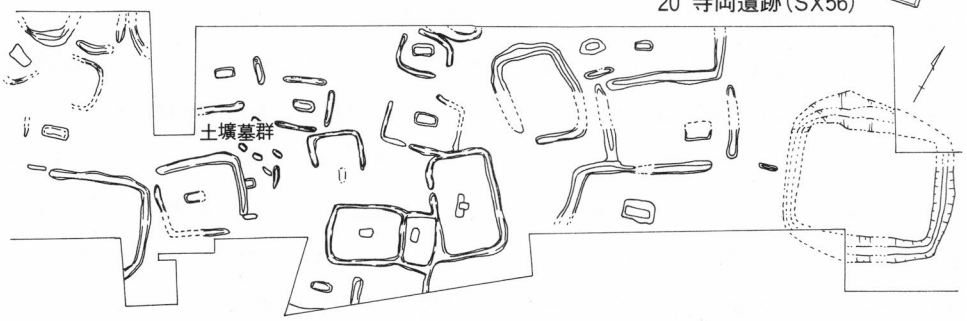
25 志高遺跡(舟戸北地区
貼石墓群)



7 坂野丘遺跡



20 寺岡遺跡(SX56)

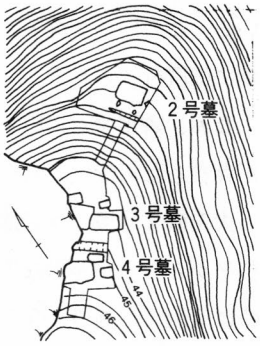


0　20m

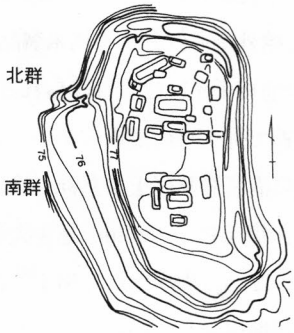
25 志高遺跡(カキ安地区方形周溝墓群と土壙墓群)

第３図　丹後の墳墓１(弥生時代前期～中期)
(縮尺は１/400に統一、番号は第１図に一致、各注文献を一部加筆)

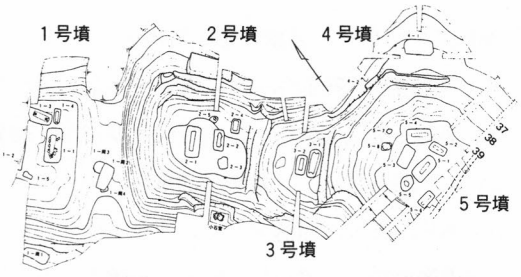
5 大山墳墓群3～8号墓



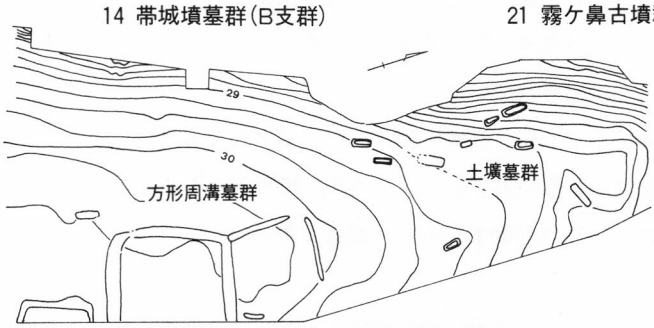
15 西谷墳墓群



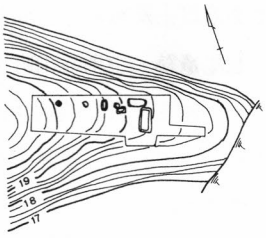
14 帯城墳墓群(B支群)



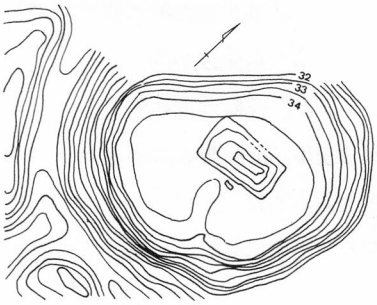
21 霧ケ鼻古墳群



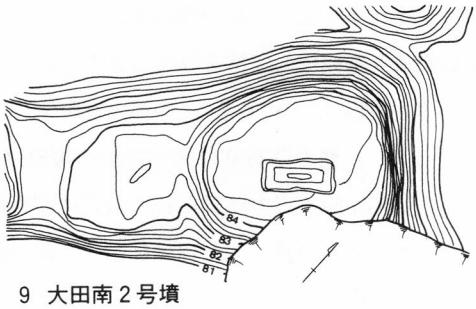
10 奈具岡遺跡(第2次調査S地区)



2 蔵谷遺跡



23 波路古墳



9 大田南2号墳

0 20m

第4図　丹後の墳墓2(弥生時代後期～古墳時代前期)
(縮尺は1/400に統一、番号は第1図に一致、各注文献を一部加筆)

いる。この内、土坑1の埋土上層から鉄剣を含む多数の供献土器が出土している。後期後葉に位置付けられる。

なお、隣接する太田1・2号墳からも弥生土器出土の報告があり、付近一帯に弥生墳墓が存在した可能性が高い。

大田南2号墳　竹野郡弥栄町字和田野小字大田[11]。竹野川に望む丘陵頂部に位置する地山整形からなる不整形な方墳である。墳丘の規模は22×18mと復元されているが墳丘裾を明瞭に区画する施設は存在しない。立地の点で弥生墳墓と隔絶する点は平野部からの比高差であり、約50mを測る。墳頂部中央に巨大な墓壙を築き短い舟底状の木棺を納める。副葬品として棺内から舶載の環状乳画文帯神獣鏡・不明鉄製品、棺外から鉄剣・不明木製品(盾か)が出土している。墓壙埋土上層出土の土器から古墳時代前期中葉に位置付けられる。

奈具岡遺跡　竹野郡弥栄町字溝谷小字奈具岡[12]。第3次調査で弥生時代後期前葉の方形貼石墓2基が、第2次調査で古墳時代前期初頭～前葉の方形周溝墓群及び土壙墓群が検出されている。貼石墓は、2基が一部重複して検出されており、復元長一辺20mを越す大形のものである。ともに周溝をもつ。埋葬主体は、検出されていない。周溝内から出土した土器に河内産の壺形土器が見られる。丘陵上で方形周溝墓群が検出されている。一辺8～15mを測る3基が確認されている。周溝内から鉄鏃が出土している。方形周溝墓群に隣接して2基以上からなる土壙墓群が検出されている。

七尾遺跡　中郡峰山町字荒山小字七尾[13]。高地性集落として著名な扇谷遺跡に隣接する丘陵上に営まれた一辺約10mを測る2基の方形台状墓である。墳頂部から複数の土壙が検出されている。扇谷遺跡とほぼ同時期の前期末～中期初頭に位置付けられる当地域最古の弥生墳墓である。

カジヤ遺跡　中郡峰山町字杉谷小字カジヤ[14]。同一丘陵上に弥生時代中期中葉の台状墓3基と後期の方形周溝墓3基が営まれている。台状墓は、連続して3基尾根線上に営まれたものでそれぞれ2～4基の埋葬施設をもつ。周溝墓は、台状墓を意識的に避けたのか丘陵緩斜面に3基連続して営まれており埋葬施設はともに1基の可能性が高い。

小池古墳群(12・13号墓)　中郡大宮町字善王寺小字赤坂[15]。丘陵斜面に営まれた2基の貼石墓である。他の貼石墓に比べてその規模は小さく長辺6.5mを測るに過ぎない。貼り石は丘陵背部を除く三方に見られその立地の状況から土留め的役割を担っている可能性がある。比較的残りの良かった13号墓から2基の組合式木棺が検出されている。弥生時代中期後葉に位置する。

帯城墳墓群　中郡大宮町字周枳小字左坂・字三坂小字帯城[16]。帯城墳墓群には、弥生時代中期に比定されているA支群の10号墓と後期後葉のA支群の7～9号墓およびA支群から

独立して存在する後期後葉から古墳時代前期初頭にかけて営まれたB支群がある。10号墓は、２本の溝により区画される墳墓で、墳頂部に埋葬施設１基のみをもつ。溝内から中期の土器が出土しているが確実に10号墓に伴うものか不明である。

７～９号墓は、一辺５～10mを測る台状墓である。７・８号墓は、墳丘上に３～４基の埋葬施設をもち、数基の周辺主体をもつ。７号墓第２主体部から鉄剣が出土している。B支群は、22×11mの墳頂部平坦面を確保する台状墓である。墳頂部から計23基の埋葬施設が検出された。23基の埋葬施設は、その配置から南群と北群の２群に分かれる。北群は、17基の埋葬施設からなるが、その配置は、他に卓越する中心主体を２～３重に囲むような配置をとる。最も外側に位置する第12主体は土器棺墓である。北群・南群ともに中心主体およびそれに準じる主体部に鉄剣を副葬している。山城による墳頂部の削平が予想され、北群と南群の間には両群を区画する溝等の施設が存在した可能性もある。

大谷遺跡(大谷古墳下層)　中郡大宮町字谷内小字大谷[17]。竹野川に望む丘陵頂部の緩斜面に複数の重複する中心主体を配置し、丘陵裾部(墳丘外)の平坦面及び緩斜面に周辺主体を営むものである。各主体部とも破砕土器を供献する傾向が見られる。後期前葉に位置付けられる。

(３) 野田川流域(与謝郡)

西谷墳墓群(２～４号墓)　与謝郡野田川町字岩屋小字西谷[18]。丘陵上の２箇所に地山を削り出して平坦面を確保した台状墓である。３号墓と４号墓は同一平坦面にあるが溝によって区画している。３・４号墓は中心主体を囲む形で３基以上の埋葬主体をもつ。３号墓の中心主体からは管玉が、４号墓の中心主体からは鉄剣が出土している。２基とも後期後葉の比較的長い時間営まれている。２号墓は、その平坦面の約４分の３が調査されているが埋葬施設は２基と３・４号墓に比べて少ない。中心主体からはアルカリ石灰ガラス製の勾玉と鉄刀が出土している。墓上の土器祭祀が顕著に認められ、木製の棚の上に多数の土器が置かれていた状態が推定される。後期後葉でも末期に近い時期である。

荒神山古墳群(17～20号墓)　与謝郡野田川町字三河内小字梅谷[19]。弥生時代後期後葉に位置付けられる小規模な台状墓である。急斜面のため墳丘の流失が著しく、不明な点もあるが18号墓から２基、19号墓から１基の木棺が検出されている。

犬石西C古墳群　与謝郡野田川町字幾地小字犬石[20]。埋葬施設等は検出されなかったが、出土遺物から緩やかな丘陵上に弥生時代後期後葉に台状墓が営まれていた可能性が高い。

内和田古墳群　与謝郡加悦町字明石小字内和田[21]。野田川を望む丘陵上に位置する古墳群である。４号墳と５号墳が調査された。４号墳は、丘陵尾根部に６×３mの平坦面を造り出し、木棺１基を営むものである。墓壙埋土上層から銅鏃２本が出土しており注目される。

5号墳は、12×15mの平坦面を造り出す長方形墳で2時期14基の埋葬施設が検出されている。その内2基以上は弥生時代後期中葉に属するものであるがそれ以外は古墳時代前期前葉のものである。後者は、4基の中心主体を囲んで他の小主体部が配置されている。墓壙内には、鉄剣・鉄刀・鉇・鉄鏃等の鉄製品が少量副葬されている。墓上での土器祭祀が認められる。

寺岡遺跡(SX56)　与謝郡野田川町字石川小字上寺岡[22]。野田川を望む台地上に立地する弥生時代中期から営まれる寺岡遺跡内から検出された丹後最大の弥生墳墓である。後世の攪乱が著しく不明な点が多いが32×17mを測る方形周溝墓の周溝内に多数の石材が散乱しておりその状況から貼石墓と考えられている。周溝は、一隅が掘り残されており墓道と想定されている。墳丘上には、6.7×4.2mを測る巨大な第1主体部を含む3基の埋葬施設が存在する。第1主体部には長さ3.85mを測る組合式木棺(内寸長推定2.5m)を納める。第3主体の棺外小口部から甕形土器(破砕土器)が出土しているほかには出土遺物はない。中期後葉に位置付けられる。

霧ケ鼻古墳群(1・2・3・5号墳)　与謝郡野田川町字堂谷小字霧ケ鼻ほか[23]。野田川を眼下に見降ろす丘陵上に連続して営まれた一辺10～20mを測る方墳である。1号墳(半壊)からは4基の埋葬施設および周辺主体、2号墳からは土器棺1基を含む5基の埋葬施設が、3号墳からは2基の埋葬施設が、そして5号墳からは、土器棺1基・土器蓋土壙墓1基を含む8基の埋葬施設が検出されている。副葬品には、鉇・鉄剣・鉄刀・鉄鏃等の鉄製品のほかにガラス小玉等が認められる。また、墓壙上及び墳丘上から多数の土器が出土している。古墳時代前期中葉に位置付けられる。

千原遺跡　与謝郡岩滝町字岩滝小字千原[24]。阿蘇海に望む台地上に立地する千原遺跡から周溝を伴う貼石墓2基が部分的に検出されている。周溝内の遺物から弥生時代中期中葉に位置付けられる。

波路古墳　宮津市字波路小字家の谷[25]。宮津湾に望む独立丘陵上に位置する地山整形からなる20m規模の不整形な方墳である。墳頂部中央部に9×6mを測る巨大な墓壙を築き短い舟底状を呈する木棺を納める。副葬品として、棺内から翡翠製の勾玉2・ガラス小玉3が、棺外から鉄鏃をはめた矢柄を納めた靫・槍・壺が出土している。古墳時代前期前葉から中葉に位置付けられる。

(4)　由良川下流域(加佐郡)

花ノ木遺跡　舞鶴市字久田美小字花ノ木[26]。由良川右岸の自然堤防上から弥生時代中期中葉の方形周溝墓の一部が検出されている。

志高遺跡　舞鶴市字志高小字カキ安・舟戸[27]。由良川左岸の自然堤防上に営まれた志高遺

第５図　志高遺跡カキ安地区方形周溝墓群

跡では、大溝と自然流路により居住域から区画された２つの墓域が確認されている。居住域の南側(大溝を挟んで)のカキ安地区では、弥生時代中期中葉から後葉の方形周溝墓群および土壙墓群と古墳時代前期前葉の方形周溝墓群および土壙墓群が検出されている。弥生時代中期の方形周溝墓群は、一辺10～20m前後を測るものでその多くが溝を共有している。墳頂部が削平されているものが多く不明な点が多いが、墳頂部に１基のみ埋葬施設をもつものが存在する。また、周溝内埋葬施設の存在の可能性もある。この方形周溝墓群の北側は、周溝墓の溝が複雑に重複しておりその中に多数の土壙が認められる。周溝墓と同時期の土壙墓群の存在が指摘できる。弥生時代中期の方形周溝墓群の一画に古墳時代前期前葉の方形周溝墓群(時期の判るものは１基のみ)が存在する。弥生時代中期の周溝墓より小形で墳頂部には１基のみ埋葬施設をもつ。周溝が全周せず隅部に陸橋をもつものが多い。この周溝墓群に隣接して土壙墓群が存在し同時期に比定される。なお、カキ安地区での墓域の広がりは、直線距離で500m以上に及ぶ。

居住域の北側(自然流路を挟んで)に位置する舟戸南地区では、弥生時代中期後葉の３基の貼石墓が確認されている。墳頂部の調査の行われた１・３号墓にはそれぞれ複数の主体部が確認されており、１号墓では墓壙埋土上層における土器供献が認められる。墳丘裾部が調査された２号墓は一辺16mを測るもので、周溝(１・３号墓と共有)を伴っている。２号墓の貼り石は調査を行った三辺のうち二辺のみ確認されている。

シゲツ墳墓群　舞鶴市字久田美小字シゲツ[28]。志高遺跡を望む丘陵上から弥生時代後期初頭の土壙墓１基が検出されている。棺上における土器破砕共献が認められる。

水無月山遺跡　舞鶴市字岡田由里小字置田[29]。桑飼下遺跡を望む丘陵上から弥生時代後期前葉の合せ口壺棺を含む土壙墓群4基が検出されている。後世の改変が著しく不明な点が多い。

桑飼上遺跡　舞鶴市字桑飼上[30]。1985年から継続調査されている由良川右岸の自然堤防上に位置する桑飼上遺跡からも翡翠製勾玉・鉇を副葬する土壙墓および弥生時代中期の方形周溝墓群が検出されている。

3　丹後地域の墳墓の類型化

今まで見てきたように丹後地域における弥生墳墓の様相は様々である。ここでは、資料的にはまだ少ないながらも発掘調査でその様相が明らかになったものを中心に台状墓・方形周溝墓・貼石墓・無墳丘(無区画)の土壙墓に分けて立地・墳形・埋葬施設の構成を中心に若干の類型化を行いたい。

(1) 台　状　墓 (A類・B類)

丹後地域における弥生時代の墓制の中心は周辺の日本海側地域と同じく台状墓である。ここで言う台状墓は、おもに地山を整形することによって墳丘もしくは墳頂部平坦面を造り出した丘陵上に位置する墳墓である。

A類　丘陵上に出現した方形を意識した区画墓である。地山整形と丘陵を切断する溝により明瞭な墳丘を造り出す。一辺10m前後を測り数基から構成されることが多い。埋葬施設の構成・墳丘外の周辺主体の有無から3つに細分する。

AⅠ類　墳頂部平坦面に複数の埋葬施設を伴うが埋葬施設の大小が認められ家族墓的性格を有するもの。七尾遺跡・カジヤ遺跡に代表される。

AⅡ類　墳頂部に1基もしくは数基の埋葬施設をもつ以外に墳丘外に土器棺等を含む周辺主体をもつもの。墳頂部の埋葬施設と周辺部の埋葬施設に著しい格差は認められない。大山墳墓群3～8号墓・帯城墳墓群A支群7～9号墓に代表される。

AⅢ類　墳頂部のみに埋葬施設をもつことはAⅠ類と同様であるが原則的に埋葬施設は1基もしくは2基に限定され家族墓的な性格を持たないもの。小さな平坦面を確保するのみで墳丘裾が明瞭でないものが多い。荒神山古墳群・内和田4号墳等に代表される。

B類　地山を整形して一辺15m前後の平坦面を確保するものの裾部を溝等で区画することは少なく墳丘裾が不明瞭な墳墓である。丘陵頂部を利用して営まれることが多い。埋葬施設の構成・墳丘外周辺主体の有無によって3類に細分する。

BⅠ類　墳頂部平坦面の確保が不明瞭で墳丘外周辺に埋葬施設を伴うもの。大谷遺跡・

坂野丘遺跡(Ⅰ期)に代表される。

BⅡ類　墳頂部平坦面に墓壙規模等で優位な中心主体を囲む形で土器棺等を含む多数の主体部を配置するもの。帯城墳墓群B支群・内和田5号墳・霧ヶ鼻5号墳等に代表される。

BⅢ類　墳頂部平坦面に副葬品を伴う大形の墓壙を1基営むもの。小形の墓壙を伴うものもある。波路古墳・大田南2号墳に代表される。

(2) 方形周溝墓(C類)

畿内地域を中心に認められる方形周溝墓は、弥生時代中期に由良川下流域に導入される。立地の違いから2類に細分する。

CⅠ類　集落(居住域)に隣接する平地部分に営まれた方形周溝墓である。現状では由良川下流域のみにしか検出例が認められない。いずれも墳頂部の削平が著しく埋葬施設については不明な点が多い。志高遺跡カキ安地区方形周溝墓群・桑飼上遺跡に代表される。

CⅡ類　丘陵上に認められる方形周溝墓である。弥生時代後期後葉以降に認められる。カジヤ遺跡・奈具岡遺跡に代表される。台状墓と同様の立地にある周溝墓であるが、前者とは溝が四辺に存在することから区別できる。

(3) 貼石墓(D類)

墳丘斜面に貼り石をもつ墓である。現在丹後地域で知られている貼石墓は5遺跡10例である。この内小池古墳群の2例を除く8例に周溝が認められ方形周溝墓として理解できる。墳丘規模は寺岡遺跡を筆頭に20m以上を測るものが主体を占めると思われる。丹後の弥生墓の中で墳丘規模の最も大きい一群である。埋葬施設は複数検出されている。その立地は、志高遺跡が沖積地に、千原遺跡・寺岡遺跡が台地上に、奈具岡遺跡が丘陵上と様々である。ほぼ同時期に出現する山陰地域の貼石墓との関連が興味深い。[31]

(4) 無墳丘土壙墓(E類)

現状では他地域に比較して無墳丘(無区画)の土壙墓の調査例は極めて少ない。ここでは丘陵上と平野部という立地上の差異から取り敢えず細分しておく。

EⅠ類　丘陵上に営まれた土壙墓群である。区画を持たない点で台状墓との格差は認められるものの副葬品・墓壙規模等の点で同時期の台状墓内の墓壙と顕著な差異は認められない。蔵谷遺跡に代表される。

EⅡ類　平野部に位置する土壙墓群であるが、志高遺跡・桑飼上遺跡の例しか知られておらずその状況は不明な点が多い。

第１表　丹後の墳墓編年表(弥生時代前期～古墳時代前期中葉)

墳墓の形態		台状墓(A)			台状墓(B)			方形周溝墓		貼石墓(D)	土壙墓(E/F)
		A Ⅰ	A Ⅱ	A Ⅲ	B Ⅰ	B Ⅱ	B Ⅲ	C Ⅰ	C Ⅱ		
第１の画期(区画墓の出現)	Ⅰ期	七尾 カジヤ(台)						(志高)			(志高)
第２の画期(貼石墓の出現)	Ⅱ期				坂野丘 Ⅰ 大谷			志高 桑飼上		千原 寺岡 志高 奈具岡	
第３の画期(台状墓の変革)	Ⅲ期		大山(2～8) 帯城 A	荒神山		(坂野丘 Ⅰ) 帯城 B 西谷 3・4	(西谷２)		カジヤ(周)		
第４の画期(首長墓の出現)	Ⅳ期			内和田 4 霧ヶ鼻 3		内和田 5 霧ヶ鼻1・2・5	波路 大田南 2	志高	奈具岡		奈具岡 志高 蔵谷

4　丹後地域の弥生墳墓の変遷

方形台状墓と方形周溝墓を中心に４つの画期をとおして弥生墳墓の変遷を追って見る。

（１）方形台状墓(A Ⅰ類)の成立(第一の画期　弥生時代前期末～中期初頭)

当地域に区画墓である方形台状墓(A Ⅰ類)が成立する時期である。この時期の方形台状墓は、後世の台状墓よりも方形という墳丘形態を強く意識するもので他地域からの完成された墓制の移入が予測できる。近年、但馬地域からほぼ同時期の丘陵上に営まれた方形周溝墓群が発見されている。[32] 隣接する２地域で初めての区画墓として異なった墓制をほぼ同時期に受入れていることは興味深い。

（２）貼石墓(D類)の出現と台状墓の変革(第二の画期　中期後葉)

当地域に隣接する由良川中流域(北丹波地域)は、方形周溝墓がその地域の墓制として早い段階から拡散している。[33] この状況は、由良川下流域でも同様であり、志高遺跡の方形周溝墓群の中には中期前葉にまで遡る可能性のものが含まれている。ところが、丹後半島部では、方形周溝墓を受入れるのは中期後葉の段階であり、貼石墓として出現する。貼石墓の特徴は、方形周溝墓であることと一辺20m級の中形墳であることが指摘できる。そして、後者の特徴は、墳頂部平坦面の広い台状墓であるB Ⅰ類の成立と関係が深い。墳丘の巨大化に伴って墓壙及び木棺の長大化も未発達ながらうかがえる。棺内に副葬品を納めることはまだなく、棺上や棺外に破砕土器や穿孔土器を埋納する傾向がうかがえるのみである。これらの墳墓は、集落内の有力集団の家族墓としての性格が濃いものである。前段階のA Ⅰ類の墳墓は、検出されていないが存在するものと考える。墳丘の大形化は、畿内地域及

びその周辺部での中期中葉から後葉にかけて方形周溝墓が大形化する現象と同じくするものである。

（3）貼石墓の消滅と台状墓の発展（第三の画期　後期前葉）

後期前葉になると貼石墓（D類）が消滅する。また、この時期以降、当地域において集落が拡散して谷合い部に沢山の小集落が誕生する。加えて畿内的な土器様相が途絶えて擬凹線文を多用する独自の土器様式の発達する時期でもある。この時期は、旧来の墓制を独自に発展させる時期である。旧来のAⅠ類は、BⅠ類で見られた周辺主体部を取り込みAⅡ類に発展する。墳頂部の主体部と周辺主体部の格差は、墳頂部の占地以外には顕著に認められない。一方、後期後葉には幅広い平坦面を確保して墳頂部に多数の埋葬施設をもつBⅡ類が認められる。中心主体が他の主体部より優位にあることが墓壙の規模・埋葬施設の配置・副葬品等から指摘できる。しかし、AⅡ類・BⅡ類を通じて埋葬施設に小児を納めたと考えられる土器棺が顕著に認められることから墳墓の性格としては、家族墓的性格の強いものと考えられる。帯城墳墓群では、AⅡ類とBⅡ類がほぼ同時期に認められる。両者の被葬者の差異は同一集落内の中で優位にある後者がより多くの家族から構成されるため大きな墳墓を確保したと言えるだろう。ほかに小さな墳頂部に1基ないし2基の埋葬施設をもつAⅢ類も散見する。また、丘陵上に方形周溝墓（E類）が認められる。

この時期から棺内に副葬品が見られる。副葬品は、玉類と鉄製品（銅鏃を含む）に限られる。この内鉄剣については後期後葉の墳墓から普遍的に認められるようになる。前段階から認められる土器祭祀についてはさらに顕著になる傾向にあり、埋葬途中の破砕供献と埋葬後の墓上供献および墳頂部供献が存在する。

（4）首長墓の出現（第4の画期　古墳時代前期前葉）

前時代にまで続いた家族墓とは明らかに異なる特定個人の墳墓（BⅢ類）が成立する時期である。現状では、波路古墳と大田南2号墳（中葉）の2例が認められる。両古墳とも弥生時代の墓制を引き継いだ地山整形による不整形な方墳（長方形墳）で、巨大な墓壙内に3m程度の短い舟底状を呈する木棺を納める。副葬品は、充実する傾向にあり、前者は棺内に玉類を、後者は鏡をもつ。棺外側には、前者は矢柄を入れた靫・柄を装着した槍を、後者は盾と考えられる木製品・鉄剣を納める。前代から見られるBⅡ類・AⅢ類も存在している。いずれの墳墓も前代の土器祭祀の傾向が失われる方向にあり、特に埋葬途中土器供献はほとんど見られないようになる。

BⅢ類・BⅡ類・AⅢ類の墳墓の共存はまさしくその墳墓の被葬者の間に階級差が存在するものと理解できる。すなわち、複数の集落からなる小地域の首長の墓（BⅢ類）・集落内の有力者に伴う家族墓（BⅡ類）・集落内の主要な構成員たる家長の墓（AⅢ類）と解釈で

きる。

この時期は、土器が明らかに弥生時代とは一線を画する土師器と呼ぶべきものに変化していることからもわかるように前時代から大きな変容が認められる。また、土器の様相から、山陰地域や畿内地域との交流がうかがえ、丹後独自の文化圏からの脱却が予想される。

5　おわりに

以上、丹後地域における弥生墳墓の系譜を三大古墳出現前夜まで追ってきた。弥生時代の墳墓は、4つの画期に伴う変革をもって古墳時代へとつながっていく。その変革は、要約すると以下のようになる。

第1期　弥生時代の開始に伴う丹後という地域性に制約された区画墓の出現

第2期　方形周溝墓を営む墓制をもつ他地域との接触による独自の墓制(貼石墓)の出現

第3期　丹後地域の独自の文化の発展による台状墓の発達

第4期　山陰地域の文化圏に吸収される中での首長墓の出現

このような弥生墓制の変革の次に迎える時代は、畿内地域との密接な関係による当地域社会の変容であり、3基の巨大古墳の誕生である。なお、巨大古墳の出現の直前には、カジヤ古墳や温江丸山古墳等の地山整形による大形の円墳や愛宕山3号墳・作山5号墳・作山1号墳・切山古墳・妹古墳等の20m級の古墳が存在することは注目される。また、3大古墳出現以降5世紀後半に至るまで、弥生時代の墓制を引く墳頂部平坦面の確保のみを目的とした地山整形による中小規模の古墳が造営され続けることも、丹後地域の墓制ひいては社会を考える上で見逃せない事実である。なお、墳墓の発展からみると弥生から古墳への移行は緩やかであり、その過程からは強大な政治基盤の誕生の要素は認められない。このような状況の中での三大古墳の出現はあまりにも唐突であり、それをを支えた「丹後王国」はまだ見えてこない。

(ひご・ひろゆき＝京都府教育庁指導部文化財保護課)

1　釋龍雄「京都府北部における弥生時代墳墓について」『水無月山遺跡発掘調査報告書』　京都府立丹後郷土資料館　1980

2　久保哲正「丹後地域における弥生墓の展開」『考古学と技術』　同志社大学考古学シリーズ刊行会　1988

3　久保哲正・大槻真純・岡田晃治ほか『権現山古墳発掘調査概報』(京都府久美浜町文化財調査報告第9集)　久美浜町教育委員会　1984

4　岡田晃治「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要〈3〉蔵谷遺跡」『埋蔵文化財発掘調査概報』1987　京都府教育委員会

5　肥後弘幸「国営農地開発事業関係遺跡平成2年度発掘調査概要〈3〉堤谷古墳群」『埋蔵文

化財発掘調査概報』1991　京都府教育委員会
6　高橋美久二「網野町岡城山遺跡出土の土器」『京都考古』8　京都考古刊行会
7　平良泰久・黒田恭正・常盤井智行ほか『丹後大山墳墓群』（京都府丹後町文化財調査報告第1集）　丹後町教育委員会　1983
8　三好博喜「西小田古墳群発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第24冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1987
9　中谷雅治・釋龍雄・杉原和雄ほか『坂野丘遺跡・坂野4号墳発掘調査報告書』（京都府弥栄町文化財調査報告第2集）　弥栄町教育委員会　1979
10　増田孝彦・石崎善久「丹後国営農地開発事業（丹後東部・西部地区）関係遺跡（1）太田・下後古墳群」『京都府遺跡調査概報』第39冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1990
11　肥後弘幸ほか『大田南2・3号墳・矢田城跡発掘調査概報』（京都府弥栄町文化財調査報告第7集）　弥栄町教育委員会　1991
12　川西宏幸・山田邦和ほか『京都府弥栄町奈具岡遺跡発掘調査報告書』　（財）古代学協会　1985
奥村清一郎・林日佐子『奈具岡遺跡第3次発掘調査報告書』（京都府弥栄町文化財調査報告第3集）　弥栄町教育委員会　1986
13　田中光浩・林和広『七尾遺跡発掘調査報告書』（京都府峰山町文化財調査報告第8集）　峰山町教育委員会　1982
14　増田信武・田中光浩・林和広『カジヤ遺跡発掘調査報告書』（京都府峰山町文化財調査報告第5集）　峰山町教育委員会　1978
15　鈴木忠司・植山茂・山田邦和ほか『京都府中郡大宮町小池古墳群』（大宮町文化財調査報告第3集）　大宮町教育委員会・（財）古代学協会・平安博物館　1984
16　岡田晃治・肥後弘幸・細川康晴ほか「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要〈1〉帯城墳墓群Ⅱ」『埋蔵文化財発掘調査概報』1987　京都府教育委員会
17　奥村清一郎・中井英策ほか『大谷古墳』（大宮町文化財調査報告第4集）　大宮町教育委員会　1987
18　西谷墳墓群現地説明会資料　野田川町教育委員会　1988
19　荒神山古墳群現地説明会資料　野田川町教育委員会　1990
20　野田川町教育委員会下川賢司氏御教示による。
21　内和田古墳群現地説明会資料　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1990
22　奥村清一郎・後藤公一ほか『寺岡遺跡』（京都府野田川町文化財調査報告第2集）　野田川町教育委員会　1988
23　中嶌陽太郎・下川賢司『霧ヶ鼻古墳群』（宮津市文化財調査報告第18集・野田川町文化財調査報告第6集）　宮津市教育委員会・野田川町教育委員会　1990
24　羽渕賢良ほか『京都府岩滝町文化財調査報告第10集　千原遺跡第3次』　岩滝町教育委員会　1987
25　中嶌陽太郎『波路古墳・波路城跡・荒神社跡』（宮津市文化財調査報告第16集）　宮津市教育委員会　1988
26　吉岡博之『志高遺跡―昭和56年度花ノ木・スドロ藪下地区及び久田美地区の調査概要―』（京都府舞鶴市文化財調査報告第6集）　舞鶴市教育委員会　1982
27　吉岡博之・西岡成郎『志高遺跡―昭和57年度カキ安地区の調査―』（京都府舞鶴市文化財調査報告第4集）　舞鶴市教育委員会　1983
肥後弘幸・三好博喜・林日佐子・吉岡博之ほか『京都府遺跡調査報告書第12冊　志高遺跡』

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989

28　肥後弘幸・田中史生・岸岡貴英「シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報第28冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1988

29　釋龍雄・増田信武・杉原和雄『水無月山遺跡発掘調査報告書』　京都府立丹後郷土資料館　1980

30　肥後弘幸・細川康晴「桑飼上遺跡昭和62年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第31冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1988
桑飼上遺跡第４次調査現地説明会資料　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1991

31　墳丘裾部に貼り石をもつ墳墓は、山陰地域および中国地方山間部に認められる。これらのうち時期の遡るものは、島根県松江市友田遺跡・同江津市波来浜遺跡・広島県三次市殿山墳墓群・同庄原市佐田谷墳墓群などに認められ、中期後葉から後期初頭に位置付けられる。

32　瀬戸谷晧・宮村良雄・松井敬代ほか『駄坂・舟隠遺跡群』(豊岡市文化財調査報告書22)　豊岡市教育委員会　1989

33　由良川中流域で中期中葉の方形周溝墓の検出された遺跡は次のとおりである。福知山市宮遺跡・同石本遺跡・綾部市小貝遺跡。